

## 富士川游博士没後五〇年記念会展示目録

### 一 医史学関係

富士川游先生は、明治二三年（一八九〇）、二五歳のとき、呉秀三、土肥慶蔵両氏と相識つたところから医史学の本格的な研究を始め、史料蒐集に没頭されるようになったが、そのはじまりは広島医学校の学生時代にまで遡ることができる。明治二五年（一八九二）には日本医史学会の前身私立奨進医会を組織し、医史学会總會の第一回に数えてゐる先哲祭を挙行され、以来、日本外科学史などを相次いで世に出し、明治三七年には代表作『日本医学史』が出版されたのである。なお『日本医学史』に対して明治四五年に第二回帝国学士院賞恩賜賞が授与されている。

### 著 書

- 『日本医学史』裝華房 明治三七年
- 『日本医学史』決定版 日新書院 昭和一六年
- 『日本医学史』決定版 真理社 昭和二三年
- 『日本医学史』決定版（年譜・著作付）形成社 昭和四七年
- 『日本医学史』特裝版 形成社 昭和四九年
- “Geschichte der Medizin in Japan” 文部省 明治四四年
- “A brief outline of the history of Medicine in Japan” 刊行年不明

『日本医学史綱要』（初版）克誠堂 昭和八年

『日本医学史綱要』日本医史学会 昭和四〇年

『日本医学史綱要』一 小川鼎三校注（東洋文庫二五八）

平凡社 昭和四九年

『日本医学史綱要』二 小川鼎三校注（東洋文庫二六二）

平凡社 昭和四九年

『△岩波講座東洋思潮Ⅴ支那思想 科学（医学）』

岩波書店 昭和九年

『△岩波講座東洋思潮Ⅴ東洋思想における日本の特質、日本科学の特質（医学）』岩波書店 昭和九年

『科学隨筆 医史叢談』（富士川英郎編）書物展望社

昭和一七年

『日本医学史講』九州帝国大学医学部雜誌部

大正一二年 発行年不明

『日本医学の変遷梗概』（孔版）東北帝大医史同好会

発行年不明

『皇国医事年表』吐鳳堂 明治三五年

昭和一六年

『日本医事年表』医事公論社

昭和一六年

『日本疾病史』（初版）吐鳳堂 明治四五年

昭和一九年

『日本疾病史』日本医書出版社

昭和一九年

『日本疾病史』（東洋文庫一三三）平凡社 昭和四四年

史籍に見えた疾病について『史学雑誌』第二三輯第八号

明治四五年

『日本外科史』私立奨進医会 明治三〇年

明治三二年

『日本眼科略史』私立奨進医会 明治三二年

明治四二年

『脚気病の歴史』臨時脚気病調査会

明治四二年

『内科史』（日本内科全書）巻第第卅冊）大正二年

大正二年

『日本小児科史』(日本小児科叢書第老編、別冊) 大正二年  
『東亜梅毒の起源に就いて』『皮膚科及び泌尿器科雑誌』

明治三五年

『治療の知識及び方術の推進』『中外医事新報』昭和九年

『療法』『実験文庫』昭和十二年

『訳解漫遊雜記』中山文化研究所 昭和十五年

『医者』『風俗』(『日本風俗史講座』第一五卷) 雄山閣 昭和三年

『医箴』克誠堂 昭和一〇年

『明治初年の医学』『日本評論』昭和一〇年

『医術の史的考察』『第九回日本医学学会誌』昭和九年

『医業に関する史談』『日本医師協会雑誌』昭和十一年

『芸備医志』芸備医学会 昭和一〇年

共著・共編

『日本医籍攷』(呉秀三共著) 私家版 明治二六年

『日本産科叢書』(増田知正、呉秀三共編) 島村利助 明治二八年

『日本産科叢書』(復刻) 思文閣 昭和四六年

『日本医学叢書』第一卷、第二卷(土肥慶蔵、呉秀三、富士川游  
選集校訂) 金港堂 明治三八年・三九年

『杏林叢書』(富士川游、小川劍三郎、唐沢光徳、尼子四郎共編)

第一輯(第五輯) 吐鳳堂 大正一一年(一五年)

『杏林叢書』(復刻) 思文閣 昭和四六年

『東洞全集』(呉秀三共編) 吐鳳堂 大正七年

『東洞全集』(復刻) 思文閣 昭和四五年

『三宅薰庵先生小伝』芸備医学会 明治四一年

学会記事

『先哲祭』明治二五年

『医家先哲追薦会記事』私立奨進医学会 明治二六年

『ジュンナー種痘発明百年記念文集』明治二九年

『前野蘭化先生の位を贈られたるを祝ふ会の記事』

私立奨進医学会 明治二七年

『杉田玄白贈位祝賀会記事』明治四一年

『日本医学歴史資料目録』第六回極東熱帯医学会 大正一四年

The Medical History and Medical Education in Japan

大正一四年

『医史展覧会陳列品目録』日本医学会 昭和九年

『医史展覧会出品医書目録』日本医史学会 昭和一三年

二 宗教関係

先生は若いときから親鸞に私淑されていたが、大正元年に鎌倉正信会を設立されてから、先生の宗教活動は活発になり、多くの著書が出された。また、大正五年には親鸞聖人讃仰会(後の正信協会)を設立されているが、それをきっかけに各地に親鸞信仰会が出来るなど、先生はこの方面でも指導的存在となられたのである。

『新撰妙好人伝』(全一四冊) 原徳書院

第一編 俳諧寺一茶 昭和一一年

第二編 松尾芭蕉 昭和十一年

第三編 明恵上人 昭和十一年

第四編 中江藤樹 昭和十二年

第五編 大和清九郎 昭和十二年

第七編 石田梅岩 昭和十二年

第九編 阿佛尼 昭和十二年

第十一編 讃岐庄松 昭和十三年

『真実の宗教』近代社 昭和六年

『真宗』森江書店 大正一〇年(四版)

『仏教の真髓』法爾社 大正一四年(三版)

『信仰と迷信』磯部甲陽堂 昭和三年

『治療と迷信』私立大日本婦人衛生会例会 昭和三年

『科学と宗教』春秋社 昭和六年

『迷信の研究』養生書院 昭和七年

『宗教の心理』天来書房 昭和一〇年

『母性と宗教』中山文化研究所 昭和十四年

『医術と宗教』『実地医家と臨牀』昭和十一年

『医術と宗教』第一書房 昭和十二年

『富士川游著述選』中山文化研究所

「真実の道」昭和十六年

「宗教的内省」昭和十六年

「瑞華雑話」昭和十六年

「科学と宗教」昭和十七年

「講録」昭和十七年

『金剛心』洛陽堂 大正五年(再版)

### 三 教育関係

先生は早くから児童の教育に関心を抱き、明治三五年、日本児童研究会が創設されたときの創立メンバーであった。また、教育病理学は先生に始まるといわれる。

『教育病理学』同文館 明治四三年

『異常児童』太陽堂 大正一三年

『異常児童性格研究』広島修養院 昭和五年

『八教育講座』教育之衛生』日本学術普及会 大正五年

『八市民講座』人性論』東京市役所 昭和五年

### 四 雑誌

先生が明治一八年、広島医学生るとき、最初に投稿した中央の医学雑誌が『中外医事新報』であった。先生は上京して中外医事新報社に入社。以来医学ジャーナリストの先駆者として活躍は目ざましいものであった。先生によって創刊された雑誌の数は十指に余る。それは医学、宗教、児童関係と広範囲に及ぶ。

『中外医事新報』明治一八年

『普通衛生雑誌』明治二年

『東京医事一覽』明治二三年

『医談』明治二六年

『医史料』明治二八年

『治療新報』明治三五年

『日本医史』 明治三十九年

『法爾』 大正七年

『飽薇』

『人性』 明治三十八年

『治療新典』(尼子四郎、渡辺房吉) 明治四〇年

『刀圭新報』 明治四二年

## 五 交 遊

先生の仕事の領域が広いために、交遊が広い範囲に亘っている。それを示す書簡の一部をここに示した。

森鷗外の自筆原稿「日本医学史序」 明治三十七年三月一四日

富士川游宛書簡

菊池大麓 依頼状 明治四二年七月三日

大槻文彦 『日本疾病史』 贈呈の礼状 明治四五年四月一六日

後藤新平 『日本疾病史』 贈呈の礼状 明治四五年五月二日

大槻如電 礼状 明治四五年五月一四日

徳富蘇峯 『医心方』 第二巻について 大正四年六月五日

森鷗外 池田京水についての問い合わせ 大正五年一月一日

呉秀三 依頼状 大正一〇年二月一二日

加藤弘之 礼状 一〇月一七日

内藤湖南 依頼状 五月二七日

藤浪鑑 日本医史学会講演について 昭和八年六月一四日

藤浪鑑 原稿が遅れることを伝える 昭和九年三月二三日

入沢達吉 葉山のベルツ記念碑について 昭和一一年四月五日

太田正雄 編集中の百科辞典について 昭和一四年一月二四日

長與又郎 長與専齋書簡を貰った礼状 昭和一五年四月二日

赤松金芳 医史学会・原稿・児童学会出席 昭和十五年六月十三日

## 六 遺 墨

自画像(墨絵)

枕屏風

鎌倉彫木盆 中江藤樹詩、富士川游書、赤松豊子彫

富士川楽和訳並びに書『愚迷発心集』自筆本

原稿 千葉医大附属医院大講堂で開催『医史展覧会目録』 昭和一四年五月二〇日～二一日

原稿 『中外医事新報』 掲載論文 昭和一二年・一五年 井上竹園先生、結核の歴史、新刊紹介、雑録

戯れ書き 赤松金芳宛  
藤浪剛一宛書簡 一卷

書簡 赤松金芳・豊子宛 礼状 昭和七年二月一三日

書簡 赤松慶治宛 慶治の父死去に対する慰め 昭和一二年一〇月一四日

名所絵はがき 赤松金芳・豊子夫妻宛 アルバム

短冊「浮草や笥の中に咲くもあり 深諦院慧雲師諧歌 楽書之」

短冊「古人學者為己欲之於己也 今之學者為人欲見知於人也 欲

之之間脱得字 昭和一四年夏 子長學人」

短冊「人多言安於貧賤其実唯是計窮力尽才短不能營耳若稍動得

恐未肯之 昭和一四年夏日 富士川楽題」

短冊「読書不見聖賢為鉛槧備居官不愛民 為衣冠盜講學不尚躬行  
為口頭禪立業不思種德為眼前花 昭和一〇年五月五日 子長學  
人題」

掛軸「天運寒暑易避人 世炎涼難除人 世炎涼易除吾心之氷炭難  
去 去得此中之氷炭 則滿腔和氣自墮地 人間到处有春風 昭  
和一四年八月下浣 子長學人」

掛軸「世の中は一念あらでなかりけり 前念はすぎ 後念来らず  
昭和丁丑の歳正月初二日 中江藤樹先生の道歌を録す 游」

掛軸「曲意而使人喜 不若直身躬而使人忌 無善而致人譽 不若  
無惡而致人毀 子長學人」

掛軸「静注静非真静 動処静得来纒 是性天之真境 楽処楽非真  
楽 苦中楽得来纒 見心体之真機 昭和丙子歳正月二日 録古  
人之語 富士川子長」

掛軸「極楽の道は一と筋 南無阿弥陀仏 思案工夫の横道をすな  
大瀧法師歌 富士川録之」

掛軸「歌よまず 後生心のなき人は さぞや寝覚めのきたなかる  
らむ 慈円大僧正歌 富士川子長録之」 (昭和一五年)

掛軸「自然というは……親鸞八六歳(正嘉二年)「自然」(じね  
ん)についての教義

掛軸「親鸞画像賛」

掛軸「難思弘誓度 難度海大船 無碍光明破 無明闇慧日 昭和  
戊辰正月初六 富士川子長」(昭和二年)

掛軸「親鸞の真字教義」

掛軸「無量壽經 赤松夫人に送呈」(昭和二年)

色紙「経営漫費 人間力大業 全依造化功 蘭化先生語」

色紙「貧賤之人一無所有 及臨命終時脱一厭字 富貴之人無所不  
有 及臨命時帶一恋字脱一厭字 如釈重負帶一恋字如擔枷鎖

昭和九年 晚春子長題」

半紙「菜根譚」の言葉

半紙「吳達、赤松金芳らの正月の寄せ書き」

日記「ドイツ留学日記」一八九八年八月一八九九年四月

稿本「支那医史稿」著作年不明

## 七 医 学

先生の医師としての活躍は他の業績に比べて余り知られていな  
いが、先生は明治三一年から三三年まで約二年半、ドイツに留学  
され、そこで、ドクトル・メディチーネの学位をとられた。その  
テーマは「脊髄癆と心臓弁膜症の併発」であった。また、帰国後  
は日本橋の中洲養生院の内科医長として診療に当たられたのであ  
る。留学中から理学療法、民間薬に関心を持たれ、それに関する  
著書を残されている。

『人工治療法及其一、二の新式に就いて』『順天堂医事研究会雜

誌』明治三四年

『医科論理学』(淀野耀淳共著) 南江堂 明治四四年

『Ueber die Koinkidenz von Tabes und Herzklappenfehlern』

『電気療法』明治三七年

『民間薬』(『日本内科全書』第二卷別録) 大正二年

『西洋民間叢』吐鳳堂 大正一〇年  
『性欲の科学』武俠社 昭和六年

八 写 真

肖像 最晩年（昭和一五年）  
肖像 中山研究所にて 最晩年

土生玄碩碑前 明治四五年

観臓碑前 大正一一年五月一〇日記念碑竣工の日

観臓碑前 昭和一〇年三月

第九回日本医学会医史展覧会会場 東大安田講堂 昭和九年四月

呉秀三、下田次郎と共に ドイツ・イェーナ市にて 明治三三年

五月

ドイツ留学前 三宅良一らと 明治二九年頃

赤松金芳家のアルバム

九 富士川先生関連資料

『富士川游先生追悼法要』小田平義編・発行

『富士川游先生』「富士川游先生」刊行会

『富士川游顕彰記』富士川游顕彰会 昭和五〇年

『富士川游と性科学研究』江川義雄著『日母広島県支部会報』

一五号別冊 昭和五三年

『富士川雪（父親）画帳』

『富士川游著作集』思文閣出版 昭和五五年～昭和五七年

『法爾』第二七四号 故富士川游博士追悼号 昭和一五年

『児童研究』第四七二号（四〇巻七号） 富士川游追悼号  
昭和一五年

（酒井シツ・蔵方宏昌）